沖縄で「本物」の国際会議　新設大、日本に刺激

沖縄科学技術大学院大学（ＯＩＳＴ）でこのほど開かれた数理生物学の国際会議に参加した。ＯＩＳＴは今秋から大学院生を受け入れる予定の新設大学だ。沖縄の自立的発展を目指し、世界最高水準の研究機関を設置する趣旨の法令に基づき、国の補助金で発足した特殊な私立大学である。

私立大に税金を投入することへの賛否もあったと聞くが、そのかいあってか多数のノーベル賞受賞者を含む超一流の科学者を教授陣にそろえ、世界最高と呼ぶにふさわしい体制ができつつある。ＯＩＳＴの公用語は英語で、教員の65％は外国人だ。大学院生も外国人が半数以上を占めると予想されている。

大学院生の受け入れに先立ち、数年前から研究活動や国際会議が催されており、今回の会議もその一環だった。会議の議題は、ある最新の数学理論の生物学への応用で、日本でまだほとんど知られていない分野だった。招待講演者は全員外国人で、いずれも超一流の研究者であり、その豪華な顔ぶれに引かれ海外から参加した研究者が聴衆の８割を占めた。

通常、日本で開催される国際会議の場合、聴衆は無論だが、講演者すら日本人の割合が多くなりがちである。これは、欧米で講演の機会が持てない若手の育成には有効だし、予算上やむを得ない側面もあるが、客観的に見て日本の国際会議は「お手盛り」と感じられることも少なくない。これでは国際会議と称しても世界レベルなのか疑わしい。

ＯＩＳＴではそんな疑念が吹き飛ぶ心地よさがあった。超一流の研究者と過ごした激動の１週間は、参加者全員の心に深く刻まれたことだろう。

こうした会議を開催できる研究機関は貴重である。この会議は、一流の研究者がＯＩＳＴに所属し会議を主催し、参加を呼び掛けたからこそ実現した。背景には、ＯＩＳＴにおける研究者の待遇や環境の整備を可能にした資金力と、私立大ならではの柔軟な予算の使い方があったと思われる。

ＯＩＳＴの将来の財政は不確定とされるが、横並びとも称される日本の大学に刺激を与える意味でも、ぜひこの希有（けう）な研究機関の永続的な発展を望みたい。

（東洋大学教授　小山信也）